バレイショの生産・消費・輸入トレンドと今後の課題

主事研究員　一瀬裕一郎

1　バレイショの国内生産と用途

バレイショは南米原産のナス科植物であり、寒冷地でも育つ炭水化物の重要な供給源として、世界中で生産されてきた。わが国には16世紀末にインドネシア経由でオランダ人が持ち込み、全国へと広まったとされる。現在では北海道および長崎・鹿児島がバレイショの主産地であり、この３道県が全国の収穫量に占めるシェアは８割を超える（第１表）。以下ではバレイショの生産・消費・輸入の概況を紹介したい。

国内生産量はかつて3,000千トンを超えていたが、2010年代にはその６割程度の2,100～2,500千トンで推移している（第１図）。バレイショはでん粉原料用、生食用、加工食品用に仕向けられ、直近16年の用途別数量は順に701千トン、616千トン、543千トンである。

バレイショには用途ごとに多数の品種があり、生食用では男爵、メークイン、加工食品用ではトヨシロ、スノーデン、でん粉原料用ではコナフブキ、コナヒメ等が代表的な品種である。これらの品種は、国・都道府県の農業試験場や系統団体、民間の種苗会社によって育種が行われてきた。

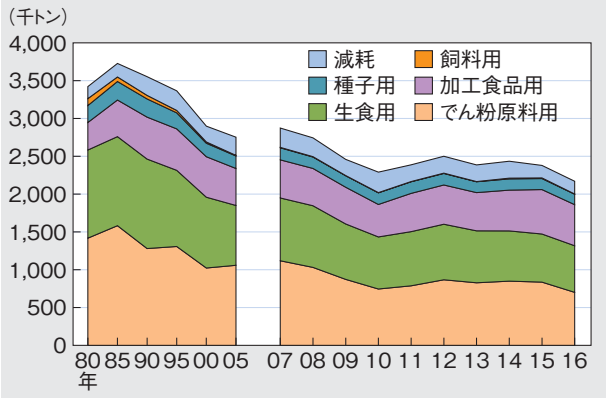
第1表　バレイショの収穫量（2016年産）

（単位　千トン、％）

都道府県	収穫量	シェア
北海道	1,715	78.0
長崎	85	3.9
鹿児島	71	3.2
全国計	2,199	100.0

資料　農林水産省「野菜生産出荷統計」

第1図　国産バレイショの生産量と用途

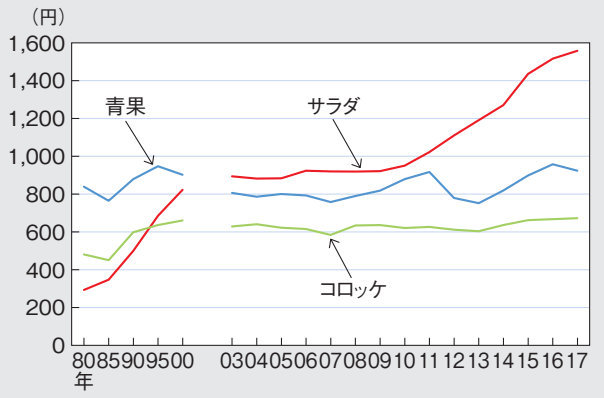


資料　農林水産省（2018）、以下同じ
（注）　数字は国内生産量の合計。05年までは5年ごとの推移。

2　サラダでの消費が堅調な伸び

家計がいかなるかたちでバレイショを消費してきたのかを把握するために、消費形態別に国民１人あたり年間購入金額の推移を示した（第２図）。「青果」の金額は750～950円ほどの比較的狭いレンジで安定的に推移してきた。バレイショを加工した「コロッケ」の金額は00年まで増加傾向だったが、それ以降600円台で推移した。同様の「サラダ」の金額は00年には823円と1980年比で３倍弱に伸び、11年頃から再び急激に増加して直近の17年には1,558

第2図　国民1人あたりバレイショ年間購入金額の推移



（注）　00年までは5年ごとの推移。

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

円となった。00年までの「コロッケ」「サラダ」の伸びは、食の外部化・簡便化の進展が背景のひとつとみられる。また、10年代の「サラダ」の急伸と「コロッケ」の停滞は、従前の食の外部化・簡便化という流れを引き継ぎつつも、食についても健康志向が強まってきたことが一因であると考えられよう。今後もこの傾向は継続するとみられる。

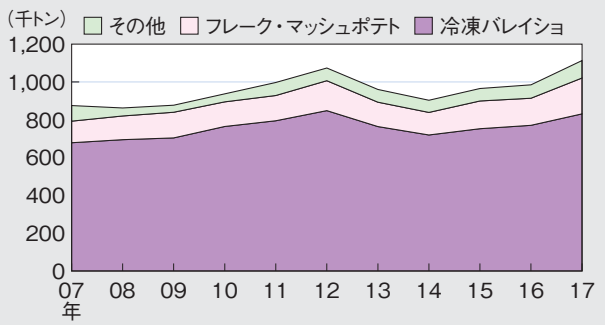
3　輸入は国内生産を補完する役割

わが国はバレイショ関連品目を年間８～10億トン(生いも換算)輸入している(第３図)。そのうち、７～８億トンは冷凍で、多くが米国やベルギーで生産されたフレンチポテトフライである。なお、生鮮の輸入は、ジャガイモシストセンチュウ等の病害虫の侵入を防ぐため、植物検疫法に基づいて制限されており、極めて少ない。

バレイショの国内生産と輸入の関係を把握するために、国内生産量を横軸に、輸入量を縦軸にとり、1998年から2016年までの19年間の値をプロットした(第４図)。回帰分析の結果は図中に示した値となり、国内生産量と輸入量の間にはかなり強い負の相関関係(国内生産量が100トン減少すると輸入量が30.6トン増加する)があるといえる。バレイショは毎年決まった数量が安定的に輸入されているわけではなく、輸入量は国内生産の豊凶変動によって規定され、豊作の年には少なく、不作の年には多くなる。換言すれば、バレイショの国内需要は年ごとの変動が小さい一方で、国内生産は豊凶変動が大きいがために、その差を輸入によって補完しているといえよう。(注)

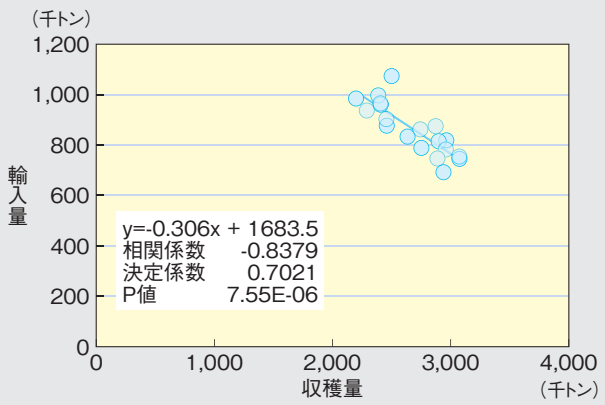
(注)例えば、2016年８月に北海道へ台風が相次いで襲来した影響で、バレイショは大不作となり、翌春には小売店の棚からポテトチップスが消えたいわゆる「ポテチショック」が発生した。一転して17年は天候に恵まれ、バレイショは大豊作となった。

第3図　バレイショ関連品目の輸入量



(注)　輸入量は生いも換算の数量。

第4図　国内生産量と輸入量の関係(1998年-2016年)



(注)　輸入量は生いも換算の数量。

4　貿易交渉の帰趨が当面の課題か

17年に交渉妥結した日EU経済連携協定では、バレイショでん粉について関税割当枠が拡大された。米国との物品貿易協定でも業界団体の意向を酌み、米国は端境期の２～７月に限られている生鮮バレイショ輸入の周年化等を求めてくる可能性があろう。これらの影響によって、国内のバレイショ生産基盤が打撃を被らぬように、万全の対策が求められる。

＜主要参考資料・WEB サイト＞

・田宮誠司(2016)「ばれいしょの需要変化と品種の動向」『野菜情報』10月号
・日本特産農作物種苗協会(2010)『特産種苗』第7号
・農林水産省(2018)「平成29年度版いも・でん粉に関する資料」
・Wall Street Journal(2017)“Japan's Potato Panic” 2017年４月17日付

(いちのせ　ゆういちろう)